

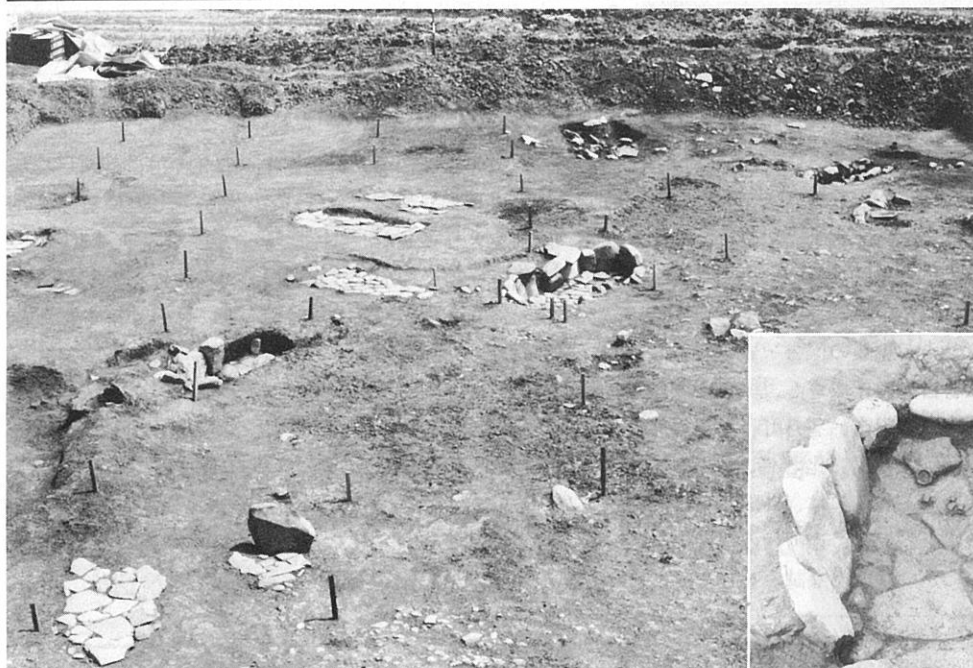
長野県埋蔵文化財センター

No. 9

1984.9.10

財長野県埋蔵文化財センター

松塩筑調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



岡ノ峯遺跡

—野沢温泉村—

写真上 石棺状遺構群 (B地区)

下 8号石棺状遺構

檀 原 長 則

圃場整備事業に伴う岡ノ峯遺跡の緊急発掘は実施予定日の遅延が重なり5月14日から7月12日まで約2か月間行われた。調査は今年で第三次にはいり、新たに縄文晩期前葉を主体とする石棺状遺構群をはじめ縄文後期の配石状遺構群等を検出した。

今回確認された10基の石棺状遺構はいずれもB地区台地上部付近に集中している。規模は7号の210×80cm—53cmを最大とし形態は長楕円形を呈す。墳底には必ず石敷がなされ、うち3基は側壁石を留めていた。副葬品は8号の滑車形耳飾や7号の硬玉製丸玉が挙げられる。また5号の周囲から石棺状遺構と同時期の埋嚢を2個体検出している。いっぽうC地区では約30の配

石状遺構が確認された。径10~100cmの楕円形ないし円形の配石には中央部に平石を据えたものや立石を伴うもの等があり各々の形態は一様でない。伴出遺物は比較的多く、縄文後期中葉を主体とする土器、磨製石斧石棒といった各種石器、炭化物や焼骨片等も出土した。

調査の結果、縄文後晩期の遺跡数が少ない北信地方にあって絶好の資料を得ることができた。今後は個々の遺構遺物についてその性格を詳細に見極め遺跡の構造的把握が推し進められるよう期待される。最後に、こうした貴重な遺跡が次々と消滅していく現状を目のあたりにして、より綿密な調査計画が必要とされる点を改めて痛感させられた。

埋蔵文化財センター 3年目を迎えて

常務理事 三村 忠 幸

昨年は、岡谷市地籍内の継続調査遺跡4、新規調査遺跡2の調査を終了させる予定でしたが用地買収の進展が思いのほかはかどらず、翌年度への一部継続となりました。総じて、`買収待ち`の状況下における発掘調査の年であったと言えます。にもかかわらず、塩尻市内において2遺跡の調査を終了させることができたのは幸いでした。

調査の結果、主な遺構・遺物としては、縄文早期の住居址1軒・球状耳飾（膳棚B遺跡）、縄文後期の敷石住居址5軒（御堂垣外遺跡）等々が検出され、一定の成果をあげることができました。

このほか、当センター蒐集の図書・資料等4,800部の活用を願って図書目録の作成をし、機会は少なかったのですが、松本市、飯田市、望月町、木曽福島町からの指導要請への対応、埋蔵文化財センターニュースの発行、遺跡研究発表、さらには、外部から講師を煩わしセンター職員研修の際に、市町村の埋文担当の方々にも参加を頂いたという新たな試みをしてみたところであります。

また、調査事務所につきましては、岡谷市内の調査面積の減少に伴い岡谷から塩尻市広丘高出に移転し、管理棟、作業室の整備を図り、先線対応の処置をとりました。

なにはともあれ、県、市の行政関係者の全面的御協力、関係の皆様方や地域の方々の深い御理解と暖かいお力添えに心から感謝を申し上げる次第でございます。

本年度は、当面、岡谷市地籍の残り3遺跡、塩尻市地籍の新規調査遺跡9を調査する予定であります。（別表参照）

調査面積は、78,330m²と昨年の2.7倍に増加したため、事務1、調査研究員7名の増員をし、総勢27名の体制をとりました。

調査面積の増加は、作業員の確保等々種々困難な問題もありますが、熱意と意欲のある職員が得られましたので、一同結束して、関係の皆様方の御指導御援助を賜りながら文化財保護のため一層の努力をしてまいりたいと存じます。

なにとぞよろしくお願いいたします。

昭和59年度(財)長野県埋蔵文化財センターの組織構成

○理 事 会

理 事 長	市村 勲 (県教育長)
副 理 事 長	酒井盛夫 (県教育次長)
常 務 理 事	三村忠幸
理 事	前田豊彦 (県企画局長)
〃	太田勝己 (県高速道局長)
〃	牧内哲夫 (県文化課長)
〃	大澤和夫 (県考古学会会長)
〃	小野光洪 (塩 尻 市 長)
〃	中村博二 (長野市教育長、市町村教育長代表)
〃	林 茂樹 (日本考古学協会員)
	10 名
監 事	青木 了 (県会計局会計課長)
〃	福沢 汪 (県教委総務課長)
	2 名

○(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩筑調査事務所長 三村忠幸(常務理事兼務)

事 務 局 長 山崎昭三

庶務部長 堀内計人 主事 熊谷由紀子

調査第一部長	河西清光
調 査 研 究 員	小菅敏男 金原 正
〃	小松 望 小林俊一
〃	小林 至 三上徹也
〃	遠山芳彦 原 明芳
〃	唐木孝雄 百瀬久雄
〃	小柳義男 関 賢司
〃	市沢英利 井口慶久
〃	小松宏昭 田中正治郎
〃	青柳英利 春日雅博
〃	小平和夫 鈴木道穂
〃	小口 徹

調査第二部長 春原正毅

●本 部 長野市大字南長野字幅下692の2
長野県教育委員会 文化課内
電 話 (0262)－32－0111

●松塩筑調査事務所 塩尻市大字広丘高出字西原
1977番地
電 話 (0263)－54－2150(代)

埋文施設紹介(7)



中川村歴史民俗資料館

〔建物の概要〕 中川村は、南向村と片桐村両村が合併して、昭和33年8月に発足した上伊那郡最南端の村である。

村では、昭和52年度より年次計画に基いて、牧ヶ原地籍の一角に武道館、弓道場、テニスコートなどの体育施設をはじめとして、高齢者創作館、青年婦人会館と、社会文化施設の整備を行ってきた。昭和56年度に至って、歴史民俗資料館、弥生時代の復原住居、茶亭、庭園造成が完成し、「中川村文化センター」として、その計画した諸施設の整備が完了した。

歴史民俗資料館は、鉄筋コンクリート2階建、校倉様式、延面積499.46㎡である。1階は民俗関係の展示、2階は歴史関係と考古関係の展示室及び特別展示室、収蔵庫となっている。建物は昭和57年1月に竣工して今年11月1日開館、一般公開の運びとなった。

〔展示〕 1階の一角には、明治初年ころの農家のかつて（だいどころ）を移築し、当時の農家の生活の一端を偲ぶことができる。民俗展示室には、衣、食、住に関するものをはじめとして、農耕、養蚕関係その他を展示。2階は、歴史関係として江戸時代の村に係る古文書を中心に展示。特別展示室は特別展の際、この室を中心に展示する。村の歴史年表や地形模型を常設し、特別展以外の期間は、館所蔵の各種の資料やその



土偶 刈谷原遺跡

他をテーマを決めて展示するようにしている。毎秋特別展を計画しているが、現在は、明治、大正時代から現在に至る学校教育で使用された各種の教科書を中心に展示している。

考古展示室には、縄文時代草創期表裏縄文土器（原田遺跡出土）をはじめ、縄文早期押型文土器（原田、茶堂遺跡）出土、縄文前期初頭薄手指痕文土器（中越式）を出土した刈谷原遺跡、縄文中期後葉の住居址34軒が発見された溝林遺跡の深鉢形土器や石器、縄文中期後葉の住居址12軒が発見された上ノ原遺跡の遺物、縄文後期上ノ原遺跡出土の鉢形土器などがあり、長野県の重要遺跡の一つである刈谷原遺跡出土の、弥生時代前期後半に編年される条痕文土器5点セットは、長野県における弥生時代前期の貴重な資料である。昭和56年度中川村県営圃場整備に伴う、埋蔵文化財包蔵地の発掘によって発見された、弥生時代中期初頭（庄之畑式併行）の住居址8軒は、当地方としては初見で、大変貴重な存在となった。中川村の弥生時代初期刈谷原遺跡～中期原田遺跡、茶堂遺跡と、中川村横前部落には、弥生時代前期末から中期初頭にかけての遺跡が多く分布している。



弥生時代前期の土器 刈谷原遺跡

茶堂遺跡のうち、中溝よりは木柵を伴った弥生後期の水田址が発見されている。木器は歴史民俗資料館が保管している。



金銅製柄頭 六万部古墳

六万部古墳は横穴式石室の後期末の横穴式古墳である。土師器、須恵器、鉄器等多数の遺物が出土した。

所在地 上伊那郡中川村片桐4.725

〒399-36 TEL 026588-3452

休館日 月曜日、土曜日午後、年末年始6日間

入館料 一般大人100円、小人（小中高生）50円
団体（20名以上）大人50円、小人30円

交通 国道153号線牧ヶ原トンネル南入口より東へ車3分

研修内容報告

(1)保存科学の基礎課程及び 応用課程

—手軽にできる保存処理—

調査研究員 小林 至

遺物の保存の仕方については、その遺物等の活用のしかた、目的によって保存処理方法が検討されてくる。単なる保管のための保存処理か、学術研究のための保存処理か、又は、展示・普及のための保存処理か、といったことによって処理方法が異なってくる。ここではこうした活用の仕方、目的にそった処理前の段階で、発掘現場で遺物が出土した時点から整理の段階までの期間の処理についてふれてみたい。

(1) 木質遺物が出土したら

木質遺物等は湿地などに長期間密封、水漬けの状態ですぐに埋れていたものが多い。そのため木質部の主要な成分であるセルロースなどは、既に流出崩壊しており、代わりに水がたっぷり含まれている。したがってこれを乾燥させると、ひび割れや収縮をおこして原形を全くとどめないまでに変形してしまう。セルロース分の残存量が少ない木質遺物ほど含水率が高く、扱いには細心の注意を要する。同じ埋蔵環境にあっては、針葉樹よりも広葉樹の方がセルロース分が失われやすく腐敗しやすい。木質遺物が出土したならば、(イ)まず水分の蒸発を防ぐことである。それにはビニールシート等を被せ、時々水をかけては乾燥させないよう注意する。又は、(ロ)木質遺物を湿らせておくために、吸湿性のある低分子量のポリエチレングリコール(PEG-60~1500)を水に溶かして木質部に直接塗布したり、布に浸み込ませて被覆するとよい。実測等が済みしだい、速やかに水槽又はタッパー等に納める。長期水漬けの場合は、ホウ酸とホウ砂が7対3の割合の10%水溶液(重量比)を予め作っておき、これを20倍に(0.5%)薄めて使用すると便利である。これはホルマリンに比べ、刺激臭がなく蒸発も少ないので防黴効果を持続できる。

漆器類の漆膜が剥れ易いものが出土したら、バインダー17を筆などで塗布し、ガーゼをはりつけて取り上げるとよい。取り上げ後は水に漬けバインダーが溶けたところでガーゼを剥がす。

(2) 金属器が出土したら

金属器に伴う他の材質の残存状況をまず把握する必要がある。実測等が終るまでの間、周囲の排水に心掛け、乾燥状態を保持するようにする。(イ)取り上げ後はよく乾燥させ、シリカゲルを入れた密閉容器に、油紙等に包んで仮保存するとよい。しかし、できれば(ロ)メチールアルコールか、またはエチールアルコールに漬け脱水処理し、更に脱塩処理するとよい。脱塩処理はアルコール(メチル又はエチル)1ℓに水酸化リチウム0.1gを溶かした密閉容器中の溶液に、大きさにもよるであろうが長期間(2~3ヵ月)浸漬し、取り上げ後更にメチールアルコールで洗浄し、乾燥させ、シリカゲル入りの密閉容器に保存する。山国信州でもこうした処理の上、仮保存するのが好ましい。

(3) ボロボロの土器と石膏使用復元土器

湿地帯等より出土したボロボロの崩れ易い土器は、洗わずに簡単に土を落す程度でバインダーに2~3日間浸漬し、取り上げ後水洗いの際に土を洗い落とす。水洗いは流水で1~2分程度に素早く洗い、濡れタオルで水滴をよく拭きとっておく。水滴が残るとそこに樹脂が溶け出し、その部分がテカテカ光ってしまう。また石膏で復元した土器も一緒にバインダーに浸漬すると、石膏部分も堅くしっかりした状態になり、表面が滑めらかになり、手で触れても白い粉が付着してこない。また水に濡れても溶けない。こうした処理をしたものは、石膏・土器部分共に、従来のように接着剤使用のわきから剥れることが少ない。また着色もし易く、拓本取りも安心して出来る。

(4) 土層の剥ぎとり転写(層序、遺構断面等)

土層を剥ぎとっておくことにより、展示は勿論、後の土層、土壌の検討等に役立つ。まず、剥ぎとろうとする土層面をなるべく平滑に削り、その面に合成樹脂を塗布する。使用する合成樹脂はトマックNR51(主剤):アラルグイドHY837(硬化剤):シンタロン(軟化剤)を5:1:1の割合でよくかきまぜ、土層面に刷毛で(スプレーでもよい=樹脂の節約が出来る)塗布する(低温だと伸びが悪い)。や、乾きかけんのとき寒冷沙を裏打ちし、再び樹脂を塗布(わずかでよい)する。樹脂が硬化したところでスコップ等を使い、力一杯引っぱりながら剥ぎとる。剥ぎとり後、水をかけ土層面を軽く洗い、浮いた土、石を取り除き、又は接着剤を使って土層を補ったりして整える。後サンコールSK50を刷毛又はスプレーで塗布し、土層面を濡れ色に仕上げ整形する。パネルに張りつける場合には強力な接着剤をつかう。樹脂の土層面への刷毛による塗布の場合、1m²当たり3~5kgが必要。埋文センタ

一でも6月中に中島遺跡にて実施した。

以上ここに述べて来たことは応急的な仮保存の仕方であるので、目的に沿った保存処理方法を検討の上、しかるべき機関に速やかに半恒久的保存処理を依頼すべきである。

〔参考文献〕

埋蔵文化財ニュース28 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター1980

埋蔵文化財ニュース31 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター1981

埋文雑記帳No.5 1984.5.1

〃 No.6 1984.7

(2)発掘調査関連技術課程

一 遺跡探査法について一

調査研究員 田中正治郎

去る3月8日から22日まで奈良国立文化財研究所での専門研修、「発掘調査関連技術課程」に参加させていただいた。内容は「遺跡調査計画」「地図・航空写真の判読」「遺跡地形の略測法」「遺跡探査法」等、かなり実用的なものであったが、今回初めて上げられた遺跡探査法について報告したい。

発掘調査以前の遺跡探査には大別して3つの方法が考えられる。表面採集等による分布調査、地形図・航空写真による判読、そして物理機器の応用(物理探査)である。ここで注意しておきたいのは前2者と物理探査とはその目的が異なることである。つまり分布調査、写真判読が全く未知の遺跡・遺構を発見する方法であるのに対して、物理探査は既知の遺跡内で、遺構の存在地点、規模、形態等を予想しようとするものであり、決して未知の土地を探査するものではないことである。

分布調査は改めて述べるまでもないので、航空写真判読法から説明したい。航空写真に地下の遺構が映るというのは少し不思議であるが、「発掘調査の手びき」(文化庁文化財保護部)の巻頭を飾る茨城県長者曲輪遺跡の例のように時と場合によってはかなり明瞭に遺構をとらえることができる。この例はShadow markと呼ばれ、地表のわずかな凹凸が斜光線により明暗のコントラストが強調されるものである。この他にSoil markとCrop markと呼ばれるものがある。Soil markとは地下の遺構が地表に乾湿の差をもたらすもので、遺

構の存在する部分には水分が多く、これを空中から撮影すると周辺部に比して黒っぽく映ることを利用したものである。Crop markもSoil markと同様なもので乾湿の差により、植物の成長に差が生じることを利用している。Soil markは国内でも確認されているが、Crop markは広大な畑地等にものみ有効なため未だ明確な例は発見されていない。

さて、物理探査法について順を追って説明したい。

大地比抵抗探査(電気探査)

土層中に水分が多いと電流が流れやすく、乾燥していれば流れにくい。大地に掘り込まれた遺構、特に溝、濠などは土層中に水分がたまりやすく、この部分は他地域に比して電流が流れやすい。すなわち抵抗が小さい。これを利用して大地の抵抗の差をみつけることにより、地下の遺構を探ろうとするもので、戦前から土木関係では地盤探査、探鉱等に用いられていた技術である。戦後、和島誠一氏を中心とするグループがいちはやくこの方法を導入したが良好な成果を挙げるには至らず殆んど普及しなかった。現在、早大理工学部の、遠藤源助氏のグループ等が以前とはや、異なる方法を用いて行っている。

大地比抵抗法では土層の乾湿にかかわる遺構、つまり濠・溝・築地・道路などに応用できるというが、雨に弱く、湿地等の地表に水分が多い地域では探査できない。また遺構が存在していても乾湿の差がなければ当然検出できない。複雑に切り合った遺構などでは殆んど検出不可能である。溝等の遺構の一部が既知でその広がり、方向等を探査するには有効かも知れないが全く未知の遺跡での探査は不可能に近い。

磁気探査法

強磁性物質(Fe, Ni等)はある温度まで熱せられると磁性を失い、冷えるとその時点での磁界の方向に帯磁する。粘土の中にはFeの粒子が多量に含まれているが自然状態では個々のFe粒子の帯磁の方向はバラバラである。この粘土を高温で焼成すると、それまでバラバラだった帯磁の方向は地球磁場の方向にかなり統制され、その結果焼成前に比べや、磁力が強くなる。従って高温が発生した地域、つまり窯体、炉等はその周辺に比して磁力が強い。これを高感度の磁力計を用いて探査しようとするものである。磁力が強くなるとはいえ微弱な磁力を測定するため、遺構が地下3m以上の深さに埋没していると検出できず、付近に電線、自動車、多数の人間等があると磁界が乱されて測定が困難になる。また磁鉄鉱等、焼成時に地球磁場の方向に帯磁させないものがある場合も当然探査できない。

現在、奈文研や帝塚山大学等で窯体、炉址等の探査を行っており、窯体の探査については良好な結果が得られているが、炉址等の探査については全く未知数である。

定常波探査法

音波、振動波等は硬地盤では速く、軟地盤では遅く伝わる。これを利用して土層の硬軟を検出し、遺構の存在を知ろうとするものである。振動波にはいろいろな種類があるが探査にあたってはレイリー波として区別される波を用いる。この波はそのエネルギーの60%が地表に対して水平に進むことが知られており、振幅の $\frac{1}{2}$ の深さまで土層を探ることができる。従ってより深い土層を探査するには振幅の大きな波を送ればよい。探査に使用する装置としては、地中へ波を送るために発信器、増幅器、起振器、振動波を受信計算するための検出器、地震計、マイコン等があり、かなり複雑なものになる。現在、奈文研が業者と共同で開発にあっているが、現状ではデータ集積の段階である。

以上、物理探査法について見聞したままを書いたが、どの方法も研究開発途上にあると思われる。

中央道長野線発掘調査速報

栗木沢遺跡 — 塩尻市長畝 —

調査研究員 井口 慶 久

栗木沢遺跡は、塩尻市長畝地籍にあり、塩尻市斎場の北東約300m、鉢伏山塊の西面のひだ状に伸びた尾根の両側の谷部に位置する。塩尻市南東部の山麓地帯は尾根と谷が入り組んだ地形を呈しており、当遺跡の調査は、今後の山間部における遺跡立地を考えるうえでも重要であると思われる。双方の谷ともその南端近くに沢を有し、北側に尾根を背にするように、平安時代の住居が営まれていた。谷はほぼ東西に伸び尾根の西側で1つとなるが、遺跡はこの2つの谷の北側の緩斜面を中心に展開したと思われる。

昭和59年5月上旬から7月上旬にかけて発掘調査を行い、住居址4軒・集石遺構1基・集石土壇4基が発見された。このうち2軒は遺構確認面が表土直下であったため、平面形を明確に把握することはできなかったが、おそらく4軒とも1辺4m余の正方形プランとなると思われる。このうち2軒は一辺のほぼ中央に石組のカマドをもつものであったが、他の2軒からは検出できなかった。住居址内出土遺物としては、東濃の

窯で焼かれたと思われる灰釉陶器が多数出土しており、他に、土師器・鉄滓等もみられた。集石遺構は、こぶし大から人頭大の石を平面的に敷いたものであり、直径80cmほどの円形に近い形を呈するが、不整形である。この石の間に、割れた緑釉陶器（硬質）の皿が、はさまった形で出土した。（写真） この集石の西側には、



緑釉陶器出土状態

直径60cmほどの焼土のかたまりも見られ、平安時代の墳墓であることも十分考えられる。今後、類例を調べながら検討したいと思う。集石土壇は、バラバラの大きさの石を直径50cmほどに集められた状態のものが4基、一直線上に並んで発見された。これらの土壇の掘り込みは浅く、石を安定させる程度のものであった。中からは縄文時代早期の土器片が何点か出土しており、該期の遺構であると思われる。この他、遺物としては、縄文時代早期、山形押型文土器・茅山下層式土器も比較的まとまって出土した。また、在地の土器と思われる、胎土に繊維を含み、指頭圧痕文を施す条痕文土器も出土し、縄文時代早期末の当地方における様相を考えるうえで、好資料となると思われる。

以上、栗木沢遺跡の概況を記したが、この調査を機に、山麓における遺跡立地が再度見直されることを願うものである。

ヨケ遺跡 — 塩尻市長畝 —

調査研究員 原 明 芳

ヨケ遺跡は、栗木沢遺跡の北側の一つの尾根を隔てた谷部に位置する。表面採集では、平安時代の土師器、灰釉陶器、縄文時代の打製石斧が採集され、平安時代の遺構の存在が予想された。

調査は昭和59年5月から6月まで行われ、最初に2本のトレンチを地形にそって入れ、土層の確認を行った。その結果予想された、平安時代の包含層はほとんど残っておらず、平安時代の遺物はほとんど耕土中

のみの出土であった。このような土層の確認の後、全面に発掘区域を広げた。遺物は平安時代の土師器、灰釉陶器、緑釉陶器の小破片が耕土中より多数出土したものの、平安時代の遺構の検出はできなかった。耕土下の黒土層を掘り下げると、縄文後期の土器片が少量と打製石斧が20点ほどが検出された。遺構としては、土壌が一基検出された。時期ははっきりしないが、縄文時代のものと思われる。他にローム層との漸移層より、山形の押型文が10片程度集中して出土したが、遺構は検出できなかった。

以上、調査の概要について述べてきた。平安時代の遺構は検出できなかったが、遺物の量からすると住居址の存在したことも予想できるが、近年の開墾によって破壊されてしまったものと思われる。

栗木沢遺跡、ヨケ遺跡、樋口遺跡と平安時代の遺跡が山麓に並び、ともに灰釉陶器を多量にもち、須恵器を用いなくなった時代なので、このころより、山麓の開発が始まったと思われる。このことは荘園制の発展と無関係ではなかったと思われ、当時の社会を考える上での好資料が、長畝地区の山麓での平安時代の遺跡の調査によって得られたと思われる。

青木沢遺跡 一塩尻市東山一

調査研究員 百瀬久雄

本遺跡は塩尻峠西麓に位置し、西流する田川によって開析された谷の南斜面にあり、標高は880m程になる。調査対象面積は380m²で、5月1日から5月31日、7月1日から8月1日にかけて調査を行った。

層位はⅠ耕土・盛土、Ⅱ黒色土、Ⅲ黄褐色土となっている。Ⅱ層の上部は黒褐色をなし旧地表と思われる。遺物はⅡ層より石鏃等の石器と黒曜石片を中心に、縄文時代早期の土器片が少量出土している。

遺構としては長方形をした竪穴遺構が1基検出された（性格が不明なためSX1と仮称する）。SX1はⅡ層中よりⅢ層にかけて掘り込まれていた。大きさは3.5×1.6mで東西方向に長い。長軸に沿って床面には幅30cmの浅い掘り込みが設けられ、東端部では幅と深さを増して壁外に突き出ている。この掘り込みには径20cmのピットが数個、間隔を置いて設けられ、深さ10cmの浅いものと30cmの深さで斜めに掘り込まれたものがある。SX1の床及び壁についてみるとその東半分では焼けて固くなっているところがあり、主に床の掘り込みに沿って認められた。またSX1には多量の

木炭が含まれ、そのほとんどが東半分に存在した。なお遺物は木炭の他には検出されなかった。

本遺跡より出土した遺物として注意されるものにポイントがある。盛土中やⅡ層より検出されたものが数点あり、柳葉形と木葉形である。長さは5ないし8cmと様々である。チャート製あるいは黒曜石製である。



SX1 西より

昭和59年度

中央道長野線(岡谷市・塩尻市)

埋蔵文化財発掘調査予定表

遺 跡 名		対象面積 _{m²}	調査面積 _{m²}
岡 谷 市	大 洞	2,910	2,910
	中 島 A	2,680	2,680
	中 島 B	1,590	1,590
塩 尻 市	青 木 沢	380	380
	八 窪	5,060	5,060
	大 原	25,800	25,800
	栗 木 沢	3,710	3,710
	ヨ ケ	1,490	1,490
	樋 口	2,900	2,900
	高山城跡	4,180	4,180
	吉田向井	5,660	2,530
	吉田川西	25,100	25,100
計		81,460 _{m²}	78,330 _{m²}

文化課だより

昭和59年度埋蔵文化財保護事業の計画(概要)

1 市町村実施予定の国庫補助事業 (単位 千円)

補助事業名	実施市町村	事業費総額	左の内訳		
			国庫補助	県費補助	市町村負担
ア 発掘調査	21	47,284	23,639	7,089	16,556
イ 重要遺跡確認緊急調査	5	6,000	3,000	900	2,100
ウ 遺跡分布詳細調査	3	3,000	1,500	450	1,050
エ 出土遺物保存処理	1	1,000	500	150	350
計	30	57,284	28,639	8,589	20,056

実施予定市町村(遺跡名)

アー佐久市(樋村ほか)・小諸市(宮の反)・御代田町(野火付)・浅科村(矢島城跡)・上田市(原田ほか)・更埴市(横沢遺跡群)・丸子町(塩川条里ほか)・長門町(上の段)・東部町(上ノ原ほか)・駒ヶ根市(青木城跡ほか)・中川村(茶堂)・上郷町(大明神原)・松本市(赤木山遺跡群ほか)・塩尻市(山の神ほか)・山形村(殿村)・長野市(石川条里水田址ほか)・飯山市(長者清水ほか)・山ノ内町(上林中道南)・野沢温泉村(岡の峰)・豊野町(旗塚ほか)・茅野市(高風呂)

以上21市町村32遺跡

イー飯田市(恒川)・松本市(信濃国府)・東部町(成立)・長野市(土口)・上田市(信濃国府)
ウー下諏訪町(町内)・戸倉町(町内)・須坂市(市内)
エー飯田市(恒川)

2 県実施事業

- (1) 県内生産関係遺跡分布調査(3,000千円)
- (2) 中央道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査
(449,277千円)
(財)長野県埋蔵文化財センターへ委託
- (3) 埋蔵文化財包蔵地パトロール(280千円)
長野県考古学会へ委託
- (4) 重要遺跡選定作業

長野県史(考古学)だより

考古資料編(遺構・遺物)の編纂進む

『主要遺跡(中・南信)』が刊行され、いよいよ考古資料編の最後である4冊目の「遺構・遺物」の編纂

作業が進行しています。

実測図の集成：本書は集成図8・解説文2の構成をとり、総計253項目に分類された遺構・遺物の実測図集成が目玉となります。県内関係書籍類からのコピーは約3万枚に達し、現在、分類整理が進行中です。

実測調査の実施：未実測資料収集のため、東大・明治・国学院各大学所蔵遺物は終了し、今年度は東信地方の代表的古墳の墳丘・石室の実測、尖石・与助屋根遺跡出土土器の実測、県内出土中世陶磁器の実測などが行われました。

科学分析調査の進行状況：本書の特色の一つは「自然環境と自然遺物」が収録されることです。そのため土器・埴輪・古瓦・青銅製品の生産地解明のための胎土分析や鉛同位体分析、古墳出土鉄剣のX線撮影などが一部実施され、今後も継続されます。

長野県考古学史の資料収集：本書第1章を飾る学史の調査も次第に集積され、とくに明治～大正期の坪井・鳥居博士などの足跡が明らかになりつつあります。6月には八幡一郎先生を囲む座談会も開かれ、貴重な話題が提供されました。

通史編の構想：「資料篇」に続く通史は、当初予定を変更し、「原始・古代」で1冊(約800頁)となり序説のあと2章ぐらいで先土器～古墳時代をまとめます。文献史学側との積極的な意見交換を行い、「木に竹」でない通史を目標として準備中です。

埋文センター日誌

- 4月2日 新任調査研究員9名を迎え新年度発足
- 25日 中島・大洞遺跡の発掘調査開始
以後 各遺跡で発掘調査開始
- 26日 塩尻市長畠地区地権者へ埋文調査説明
- 5月30日 第5回理事会(58年度事業・決算報告)
- 6月7日 埋文発掘調査打合せ会
- 21日 全国埋文協総会 和歌山大会 22日まで
- 7月3日 松本市平農協中央道対策委へ調査説明
- 10日 酒井潤一先生(信州大)中島遺跡の地質について御指導
- 13日 塩尻市吉田川西地区地権者へ調査説明
- 17日 吉田川西地区対策委へ埋文調査説明
宮下健司先生中島遺跡について御指導
- 20日 米山一政先生高山城遺跡を踏査御指導
戸沢充則先生中島遺跡について御指導
- 22・29日 中島遺跡現地説明会兼展示会
- 31日 NHKテレビ 大原遺跡中心に取材
「夏に学ぶ」 放映8月7日